

東大寺と太陽の道、その先行モデル 「蝶の雑記帳 87」

前稿「蝶の雑記帳 85」で、インドネシア・ジャワ島のポロブドゥール寺院が東大寺と同じく毘盧遮那仏を“本尊”とすることを手がかりに、日本列島にあったのと類似の「太陽の道」崇拝がジャワ島にもあったことを論証した（両寺院の関係は「蝶の雑記帳 85 付録」でも話題にした）。しかし、前稿を読みなおしてみると、ポロブドゥールの丘を通る太陽の道があったというアイデアを論証するのに性急すぎて、日本の東大寺が太陽の道の新しい形態を担って建てられたという要点が必要なだけ論じられていない。前著『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』でも、東大寺は付随的な論点としてしか取りあげられていない。東大寺と太陽の道の間を主題として議論しておく必要がある。

仏教は、理論体系をもつ世界宗教として日本列島に入ってきて、しだいに社会的な制度に組みこまれ、文化に影響を及ぼすようになった。ここでの議論はその初期の事態を考察することになる。『隋書』が、倭国から「沙門数十人が仏法を学ぶために来た」と書いている。それは 600 年代初頭のことである。そのころには仏教が制度に組みこまれ始めたのである。やがて、隋・唐に倣って仏教が国家を鎮護する宗教として採用される。740 年代の日本国で、諸国に国分寺を建てること

が決まり、王都奈良で東大寺大仏の鑄造が始まった。

ところが、701年に発足した律令国家にはすでに祭政一致の政治制度が制定されていた。古来の信仰を体現した各地の神社は神祇官の下で管轄されるようになり、神社の頂点に立つのは天皇家の高祖神を祀る皇大神宮であった。その既存の宗教制度に、諸国の国分寺と頂点に立つ東大寺というもう一つ別の具体的な組織を加えて、外来の宗教である仏教も国家の宗教として採用したのである。並立する宗教は組織を適合的に運営することを求め、強制力のある制度は、人々に心理上でも両者を整合させるように求めただろう。

この全般的な状況が東大寺のあり方を規定し、実際の建設では日本古来の宗教思想が、隋・唐の大興善寺をモデルとする東大寺のプランに影響した、と考えることができる。

隋の大興城と唐の長安城の王都のプランで、大興善寺は、王宮の南、道教の道観と向かい合わせに南北の中心軸朱雀大路に面して建てられた。同時代の600年代、百済の都泗泚でも、隋・唐と同様に王宮の南に定林寺が配置された。ところが日本国には、古来の信仰の頂点に立つ神社皇大神宮が伊勢にあった。そして、皇大神宮は「太陽の道」崇拝に起源をもち、太陽の道は東西線が主軸であった。そこで、既存の奈良の都に鎮護国家の仏教寺院を建設するのに、南北の朱雀大路にこだわらず、むしろ、東西線を尊重する修正プランが採り入れられたのだろう。東大寺は平城宮の真東に建てられた。

東大寺大仏殿の棟が指す東西線上にはお水取りで有名な二月堂わきの泉がある。この泉は、奈良地方で古くから大切にされた霊地で、春分・秋分の日の出を拝む「太陽の道」崇拝に関係していた、と考えることが可能である。ひょっとすると、平城宮の位置を決めたのはこの二月堂わきの泉だったのかもしれない。

東西線上にある二月堂わきの泉・東大寺大仏殿・平城宮に、平城宮の東隣にあるタカミムスヒ神社を加えれば、それらは偶然ではない重要な関係性を結ぶ。『記・紀』神話で、タカミムスビは、造化の三神の一人で、天孫ニニギの降臨に際し天照大神よりも優位に立って命令を下す神である。タカミムスビの娘である万幡豊秋津師比売(ヨロズハタ・トヨアキツシひめ)がニニギを産んだとされている(平城宮の東隣という場所も「延喜式内社の大社で新嘗などの弊に預かっていた」という社伝もその重要さを物語る)。前著は、古代福岡都市圏の人々が神々の物語をつくりだし、それが「太陽の道」という象徴的観念に結晶したことを明らかにしたが、その始原の神タカミムスビが平城宮・東大寺大仏殿を通る東西線上に祀られているのである。この東西線は古来の「太陽の道」信仰を継承していると見なすことができる。

この見方は、東大寺にまつわる出来事を挙げていけば、確実さを増す。注目すべきなのは、大仏が建造され始めると、宇佐宮が「大仏建造に協力するという旨の託宣を発し」、完

成すると、「八幡神を護持して宇佐宮の女性の禰宜が金銅の鳳凰をつけた紫の輿(最高位の格を示す)で転害門から入門した」とされることである。この年、東大寺の守護神として八幡宮が勧請された。現在、手向山八幡宮とは別に境内の大仏殿西隣にも八幡殿がある。重要なのは、この禰宜は「太陽の道」信仰で神が憑依する巫女だという点である。すなわち、卑弥呼の後裔であり、琉球の聞得大君に当たる。開眼法要では、「太上天皇・天皇に続いて八幡神が大仏殿に入った」という。東大寺大仏殿の完成は758年だが、781年には、朝廷が八幡神に国家鎮護・仏教守護の神として八幡大菩薩という神号を贈った。東大寺は、最初から宇佐宮と深いかかわりのなかで建造されたのである。先ほど述べたように、古来の信仰と融和させる方策として行なわれたと考えなければならない。

それでは、国家を挙げて建設する東大寺に神社を関係づけるのに、なぜ、神社の頂点に立つ皇大神宮ではいけなかったのだろうか。その重大な役目を果たすのに、なぜ、皇大神宮をさしおいて宇佐宮が選ばれたのだろうか。従来考えられてきたように宇佐宮を単に一地方の神社とするのでは、この問いに答えることができない。

外来の仏教を制度に採りこむのに融和させるべき在来の信仰とは、太陽の道とそれに結びついている神々への崇拝であった。宇佐宮がその信仰体系のシンボリックの神殿として古墳時代に創建されたことを、前著『倭国はここにあった 人文

『地理学的な論証』で論じた。宇佐宮が指示する太陽の道は、福岡都市圏にあった三つの弥生遺跡を通る太陽の道を継承し、700年以上の伝統を誇っていたはずである。宇佐宮が発したおびただしい神託が人々の宇佐宮への崇敬を証言している。他方の伊勢神宮はまだ80年ばかりの歴史しかなくて人々に浸透しておらず、宇佐宮が古来の信仰を代表する権威を保っていたと考えることができる。だから、東大寺を建立するのに、宇佐宮の伝統ある権威を取りこむことが有効だと判断されたのだろう。

こうして、東大寺が太陽の道を継承する寺院として建てられたという見方がいっそう確実になった。実際に、太陽の道と想定される平城宮・タカミムスヒ神社・二月堂わきの泉を結ぶ東西線上に棟が来るように、大仏殿は建てられたのである。東大寺に八幡殿が併設されたのも、その東西線が古い太陽の道を継承することを公示するためであっただろう。

この見方を補強する符合が存在する。前著は、皇大神宮が先行する太陽の道の神殿宇佐宮をモデルとして建設された、と提唱した。そこでは、皇大神宮を通る太陽の道と宇佐宮を通る太陽の道との地理的な相似に加えて、次のような符合を明らかにした。宇佐宮は三つの社の連結された古い建築様式をもつが、中央の社で日の神の娘である三女神が斎き、西隣の社に八幡神(やはたの神)が祀られている。皇大神宮は一つの社に太陽神天照大神を祀るのだが、合殿の神として西隣に

万幡豊秋津師比売(よろずはたひめ)がいる。ところで、神話発祥の地と考えられる福岡都市圏の古い神社はみな、神話に登場する神を祀っている。宇佐宮の「やはたの神」はこれまで正体がよく分からないとされてきたが、そこに祀られた神も神話に登場する古い神だとすべきである。ところが、万幡比売の幡はもともと旗ではなく織機の機を意味していた。つまり、「やはた」とは多くの機(はた)を意味し、「よろずはた」のことだったと解釈できる。宇佐宮で太陽神に斎く三女神の西隣にいる八幡神と皇大神宮で太陽神の西隣にいる万幡比売は対応するのである。こう考えると、東大寺境内で本尊を安置する大仏殿の西隣に八幡殿が配置されているのは、太陽の道の神殿宇佐宮の配置と一致し、皇大神宮の配置とも相似なのである。この符合も、東大寺を建設するとき太陽の道が意識されていたことを証言する。

さらに言えば、仏教寺院としての東大寺に安置する大仏が、太陽神信仰に適合する毘盧遮那仏すなわち光明遍照仏であることも、意識されていたにちがいない。

*

さて、考察の焦点を仏教寺院という点に合わせれば、もう一つ重要な論点が見えてくる。

『隋書』の記述にある冠位十二階と沙門の派遣は、すでに600年代初頭、倭国の政治制度が整えられ、仏教が制度的に

導入されようとしていたことを教える。現在支配的な日本古代史のパラダイムでは、いくつかの王の宮が置かれた飛鳥の飛鳥寺などがそれにあたとされる。ところが、天武の飛鳥浄御原宮も置かれた飛鳥は、寺院を含む国家の諸機関を配置できるほど広い土地には見えない。次の藤原京(690～710年)で初めて規模が大きくなったが、国家的な寺院の配置プランはなかったようだ。大和には、平城宮と東大寺以前に寺院と王宮を南北か東西に直列させる例はなかったのである。すると、東大寺が建てられた700年代中期まで、百済に遅れること100年以上、唐の王都プランに倣った鎮護国家の寺院が大和にはなかったことになるだろう。

しかし、日本列島にそういう先行プランがあった。それは太宰府政庁と観世音寺で、遅くとも600年代中期には存在したことが確実である。観世音寺のある区画は太宰府政庁跡を含む区画に勝るほどの規模をもち、それが南側の大路に面して東西に直列している。これは王都のプランではないだろうか。600年代を大局的に把握すれば、長安のような国家的寺院をもつ王都のプランが日本列島に最初に導入されたのは太宰府だった蓋然性が高い。東大寺はその先行プランに倣った、つまり東大寺には、皇大神宮に対する宇佐宮のように、観世音寺という先行モデルがあった、と考えるべきだろう。

宇佐宮・観世音寺・太宰府政庁は東西線上に直列する。「太陽の道」という概念は、前著『倭国はここにあった 人文地

『理学的な論証』で論じたように、神殿宇佐宮が指示する東西線上に王がいたことを要請する。その太陽の道の焦点を、もう一つの神殿宗像大社が真北から指し示している。それが太宰府政庁のあった区画である。中国史書を最も論理的に解説しても、太宰府が倭国の王都だったという結論に導かれる。そして、宇佐宮が指し示す「太陽の道」上に新たに創建された観世音寺も、太宰府政庁の東隣に位置して、両者の東西整列は王都のプランであることを表示しているのである。

仏教が制度的に導入されたことを公示する施設として戒壇院がある。高名な律宗の僧鑑真は、戒律を授ける僧として日本国に招かれ、752年の遣唐使の帰国船に同乗して753年に来日した。Wikipediaの「戒壇院」は、観世音寺にあった戒壇院だけを説明して、753年12月20日に薩摩坊津に着いた鑑真は、12月26日に太宰府で授戒を行なったと記述する。大和の戒壇院のことは東大寺の項を見よとしているが、そこでは、754年戒壇を築いて聖武太上天皇と光明皇太后が鑑真から受戒し、翌年戒壇院を建立したと書く。それまで戒壇がなかったのである。考えてみると、大和に戒律を授ける場所があったとすればそこで授戒の儀式をしたはずだから、それがなかった蓋然性が高い。そもそも鑑真を招聘したのは、大和に授戒の場がなく、正式に戒を授けることのできる僧がいなかったからだろう。事実、当時の大和に私度僧が多かったので鑑真が招かれた、とWikipediaは書いている。

これに対して、日本に着いたばかりの鑑真が太宰府に立ち寄ってあわただしく授戒の儀式を行なえたのは、そこにはすでに授戒の場があったからだと考えることができる。600年代初頭、すでに冠位十二階のような制度が定められており、仏法を学ぶために隋へ派遣される沙門が数十人もいる状態なのに、僧の資格を与える何らの方式もなかったとは考えにくい。それから150年を経るあいだに諸国に多くの寺院が建てられ、代々相当の数の仏僧がいたはずなのに、日本列島に正式に僧を認定する制度もなく過ごしてきたとは考えられない。いずれかの時点で戒壇院に当たる施設が設置されたにちがいない。そして、それは太宰府の観世音寺にあったのである。したがって、600年代、当時の唐の寺院制度に倣って、観世音寺は国家の寺院として創建され、そこに戒壇院もしくは授戒の堂も附設されていたとするのが合理的な推定である（初めから戒壇院と呼ばれていた可能性が高い）。この考察からも、太宰府の観世音寺が先行する鎮護国家の寺院であり、東大寺のモデルだったと推定できる。

大和の日本国は、東大寺を建立するまで、戒壇院を併設するような国家的な寺院をもたなかったのである。大仏建造の時期に鑑真を招聘したことがそれを証言するのだ。

そうすると、前節で東大寺について言ったことは、むしろ先行する観世音寺に当てはまる。宇佐宮を神殿とする太陽の道の主宰者である王は、新たに仏教も鎮護国家の宗教として

導入するのに、既存の「太陽の道」信仰に調和するように、太宰府から宇佐宮に通じる「太陽の道」東西線上に観世音寺を建てた、と考えることができる。だから、観世音寺は政庁一帯の区画の真東にあるのだ。後代の東大寺がそれに倣ったとすれば、東大寺を通る東西線が観世音寺を通る東西線に似ているのは当然である。観世音寺が配置された太陽の道を聖別するのは宇佐宮なのだから、東大寺が宇佐宮による権威づけを求めた理由がすんなりと理解できる。

前著をくりかえせば、太宰府を焦点とする太陽の道は、福岡都市圏の弥生時代の太陽の道を引き継いで、東の大根地山と西の油山夫婦岩を結ぶ東西線に変更し、真東に宇佐宮、真北に宗像大社（太陽の宿る沖ノ島の祭祀を司る）を創建して、夏至と冬至の標識となる山々の神社にも神々を拝祀して構成されていた。そこに投影されていた古代からの信仰体系に、さらに観世音寺を創建して加え、仏教をも取りこんだのである。こう理解すれば、大宝律令を發布し成立して間もない日本国が、東大寺の建立に際し、その由緒ある信仰を継承しようとしたことが判る。その動きが、伝統を帯びる宇佐宮の権威を公式に復活させ、やがて宇佐宮を日本国の王朝の第二の宗廟にしたのである。

初めの方で、並立する宗教制度が人々に心理上でも両者を整合させるようにしたと考えたが、現実に神仏習合として現

われた。伝承で最初に神仏習合が始まったところとして挙げられるのは、宇佐宮と国東半島である。そこでは、700年代初期に神宮寺が建てられたとされる。この説は、太宰府の観世音寺が、日本列島で最初の国家制度的な仏教寺院として太宰府-宇佐宮を結ぶ太陽の道上に創建されたとする見方に親和的である。並び立つ国家的な神社と寺院の神と仏が、人々の心に両者を対照して思い浮かべるようにしたであろう。八幡神を仏教と結びつけるのになぜ菩薩名が使われたかの理由として、寺の名が示すように観世音寺講堂の本尊が観世音菩薩だったことを挙げるができる。国の先を国東と書く視点が九州の中心地太宰府にあった可能性は大きい。769年の道鏡事件の時代にも宇佐宮を管轄する主神(かんづかさ)は太宰府にいた。

ところで、福岡都市圏で始まった「太陽の道」信仰は神々を山々に割り当てて神話を形成したが、いつのころか仏教と習合して、若杉山・飯盛山・宝満山・大根地山は修験道の霊場になった。それがいつごろ始まったかが問題だが、仏教が広まりさらに太宰府に観世音寺が創建されたころにまでさかのぼれるとするのは有望な考え方である。神仏習合の条件は仏僧の多かっただろう太宰府付近に有利である。その習合が観世音寺と並んで国家を守護する宇佐宮にも及び、国東半島にも修験道の山岳信仰が広まった、とすれば理解しやすい。

余談を加えれば、後世の本地垂迹説で伊勢の大神を大日如来とし八幡神を阿弥陀如来としたことがいわれなしとはで

きない。太陽神を大日如来に結びつけるのは至極順当だけでも、天照大神を祀る皇大神宮が国家を守護する神社で、国家を鎮護する大和の東大寺金堂(大仏殿)の本尊が毘盧遮那仏すなわち大日如来だったことと無縁ではないだろう。他方の八幡神はすでに大菩薩とされていたが、その八幡神を祀る宇佐宮が指示する九州の「太陽の道」上に建てられた観世音寺金堂の本尊は阿弥陀如来だった。こちらにも、八幡大菩薩を阿弥陀如来に格上げする由縁は存在したのである。

*

以上、東大寺の方から宇佐宮との関係を考察したら、九州の「太陽の道」とその神殿宇佐宮の果たした重要な役割が、前著『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』よりも明瞭になった。前著の議論は補強されたと言いうことができるだろう。さらに、奈良で東大寺が建立された経緯を検討することによって、太宰府の観世音寺が日本列島で最初に王都プランに沿う鎮護国家の寺院として創建され、東大寺は観世音寺をモデルとして建てられたという見方が浮かび上がった。それは、700年代の日本国が歴史上どのような地位にあったかを明るみに出し、ひるがえって700年以前の日本列島の歴史に関して、前著の論証に追加できる論点の一つとなる。

2019年10月10日

海蝶 谷川修